

なくして非資本家的中産者であつたといふことは、古い論文においてもはつきりと述べられてゐる。にも拘らず氏の古い見解においては、このことは問題の主題とはならず、かへつて商業資本と産業資本との矛盾（共生と對立）、その矛盾の統一體としての初期資本の發展そのものが問題とされてゐるのである。

こう見てくると、氏の見解の變化といふことは、單に初期資本なる概念の取捨といふだけのものではなく、もつと根本的なもの、すなはち氏のよつて立たれる「立場」の決定的な轉換ではないであらうか。言ひかへれば問題を提起する、その提起の仕方「視角」の「轉換」を示すものではないだらうか。古い見解においては、問題は歴史事象における内在的矛盾及び矛盾の發展如何として提起せられてゐる。従つてここでは、歴史事象は單なる Entwederoder をもつてではなく、それをも含むより廣汎な矛盾の統一體として把握せられてゐる。しかるに新しい見解においては、問題は必ず Entwederoder をもつて提起せられ、従つて結論はまた必ず二者擇一であつて、ここでは歴史事象に内在する矛盾を矛盾として容れる何らの餘地もない。言ひかへれば、新しい立場では、ある特定の歴史事象を取上げてその内在的矛盾の運動を探索することではなくして、それを形成せる主體的條件を、その由つて來る過去の源流へと遡つて追跡することが問題の主題となつてゐる。かゝる立場をとれば、あたかも河の流れをその主流を遡つて遡航するのにも似て、問題は必ず Entwederoder をもつて提起せられねばならぬことは理の當然であらうと思ふ。複雑な言ひ方ではあるが、古い立場を「發展

史的」立場と言ふとすれば、新しい立場は「遡源史的」なそれだとも言ひ得るであらう。

大塚氏の見解の變化が實は氏の立場「視角」の轉換であることは、本書の後篇（第五から第十一までの諸論文）においても明瞭によみ取れるのであるがこゝでは省略する。ただ氏の古い立場は第五、第七の論文に、新しい立場は第九、第十の論文に最もよく現れており、兩者を對照してよむことによつて氏の立場「視角」の轉換が明瞭に浮び出て來ることを申し添えて置きたい。

天坊幸彦著

上代浪華の歴史地理的研究

吉田敬市

本書は元浪速高等學校教授であつた著者が永年間の調査研究の集積にして、大阪附近の郷土史といふべきもので四百二十七頁の大冊として昭和二十二年五月刊行せられたものである。全篇五篇より成り第一篇は上代帝都の研究として仁德天皇難波高津宮、孝德天皇の長柄豊碓宮、聖武天皇の所謂難波宮等を取りあげその舊蹟、位置等につき詳細なる論考が加へられ、長柄豊碓宮は舊來の上町丘陵説を排して現在の天蒲附近であるとし、聖武天皇の難波宮は仁德天皇の高津宮附近であり、味經宮は現在の流川北岸西中島以東の地であると論述されてゐるが、その正確なる舊位置は明かにされてゐない。

然し味經宮の論考は種々の點から資料を蒐められてゐるが、今一つ物足りなきを感じると共に獨斷の憾が残されてゐるやうである。

第二篇の上代難波の歴史、地理研究は書題と一致する項目であり全篇中最も我意を得たものである。幾多先考の論考を参照され、難波文化の發祥地は上阿丘陵を中心として、その東西兩斜面である事丘陵の東方江灣地帯の歴史、地理的説明や丘陵北岸の難波堀江や長柄船瀬の論説は洵に要を得たもので、大阪市域の變遷史を手際よく述べられ、流石は老練なる手續の程を思はしむるものがある。

第三篇の攝河泉に於ける條里遺制の研究は夙に歴史地理その他の雜誌に發表されたものを取纏められたもので全篇の約三分の一を充てた大論文である。本書の中核を爲すもので氏の最も苦闘されたものであり、幾多の貴重なる業績が織込まれ學界に貢獻する事大であり従つて氏にとりては會心の雄篇であらう。特に中心的な部分攝河津條里の研究で島上郡と島下郡及び豊能郡と川邊郡との郡境、並に城攝の古境を復原し、その結果古來問題とされ未解決であつた繼躰天皇の藍野陵の位置を正しく認定し得た氏の功績は盡し高く評價されるべきものであらう。即ち藍野陵は延喜式には島上郡とあるが、事實は島下郡にある。よつて古來郡境異動説或は式の誤認説等種々の論説を見るに至つた。然るに氏は條里の研究上より藍野陵は島下郡の所屬である事を正しく認定されたものである。

第四篇攝河津大社寺の研究には生國魂神社、三島鴨神社、溝咋神社伊居太神社、四天王寺御手印縁起の五項につき古來よりの疑問に對し論考を加へられたものであるが、殆ど純歴史的な論考である。只

伊居太神社については條里研究より郡界の復原を試み豊島郡池田中腹の現在の伊居太神社は式のそれに非ず、池田は池田氏の居住によつて發生した地名で古くは爲奈縣と呼び、平安時代には秦下郷、鎌倉時代以降吳庭莊と稱へた。池田の新地名によつて一度その所在を失つた伊居太神社がその呼稱の同一である事から、式文に合はないにもかかはらず、郡境の變遷を條件として現地に定つたもので、伊居太神社と定められる以前は式内爲都比古神社であつた（三二六頁）と論じてゐるが、著者も自認する如く、あまりにも曲解獨斷の謗を免れないやうである。

第五篇の上代の三島郡の郷土史研究の多くは、既述の諸項を資料として三島郡の歴史地理を述べ更に、阿武山古墳、五百住の語根探究、水無瀬宮をあげ歴史地理的な記述を添へられてゐる。

以上本書の概要紹介であるが、全體を通じての腹藏なき愚見を述べれば次の通りである。最も強く響くものは、やはり歴史學者の書かれた歴史地理で地理學徒の見た歴史地理とはその間に於て大なる運庭があるといふ點である。歴史家が歴史の一分科として取扱はれる所謂歴史地理なるものは古くよりこの種の型であつた。即ち史料と地名とを強いて聯關せしめんとする方法——地名の考證學——で大局より見て一步も將來の歴史地理より前進してゐない事が、吾人の最も物足りなきを感じる所である。若し天坊氏の本書を以て最近の我國に於ける歴史地理を代表するものとするれば半世紀の間我歴史地理は幾何の進歩を見たか疑はざるを得ない。勿論本書の中に於ても、時に參謀本部の地形圖を利用し或は地質圖を引用して説明の一

助とする等研究の態度については一應の敬意を表するものであるが地形圖、地質圖引用並にその取扱に關する方法等については、大いに缺くる所があり、その要を盡してゐない。例へば味經宮の位置論に於て現在の地形圖を以て科學性を持たせようとするが如きは、時に大なる危険が伴ふ事を知らねばならぬ。即ち、現在の高距即往古の高距でない場合が多い。特に大河川の下流平野の如く大洪水毎に土砂堆積度の變化烈しい場所又は土地隆起度の不均一なる新堆積地帯等は、地形變動率が大きいから、その取扱には最も注意を要する所である。

本書を手にして評者が第一に眼を注いだ點は難波入江の歴史地理的考察に對する氏の研究方法とその結論とであつた。何故なれば難波入江は近世まで淀川、大和川等がここに流れ合ひ一大灣江を形成してゐたやうであるが、その開發變遷に關しては、未だ満足なる解答が與へられてゐない。難波地方郷土史研究の第一人者たる著者がこの研究に如何なるメスを加へられたであらうかといふ好奇心が働いたからである。この解答に對する著者の研究方法は依然として、歴史的思想を主幹としたもので、地學的根據に立脚する科學的研究が極めて寡い事を知り、聊か失望せざるを得なかつた。自然的土地變遷の事情を明かにし、この上に展開せる人文的事象の變遷を併せ研究してこそ、灣江地帯の歴史地理が闡明にされるものであるまいか。

著者もこの點に全然無關心であつたのではない。その必要は充分認められ、既述の如く或は陸地測量部地形圖を以て地形を論じ或は

特に地質柱狀圖を以て説明の一助とされた事は確かに著者の意圖の程が窺はれ舊來の歴史地理研究に一步前進したものと云ふべきである。然し折角の此等地學的資料を採用しながら、資料不足とその取扱が不十分の爲め研究が科學性を有する事寡く、地域變遷の状態を十分闡明し得なかつた事は残念な所である。難波入江が時代と共に漸次縮少し遂に干拓され今日に至つた變遷史の研究には、地學的方法と歴史學的考察との二方面から考察すべき事は言ふ迄もない。然るも地學的思想がその根本をなすもので、之を除外視した研究は正に砂上の樓閣に等しいものである。然るに舊來の歴史地理研究の大部分は文獻と地名との考察に終り大地そのものゝ研究は殆ど顧みられなかつた。従つて論旨の根底に確固たる基礎がなく、眞の歴史地理とは言ひ難く、結局地理的推定の歴史學の域を脱しなかつた。この點が地學をやる者から見れば大いに不足を感じる所であつた。

天坊氏は歴史家であり地學者ではない、評者の言ふ地學的考察云々を天坊氏に望むことは無理かも知れない。歴史學の立場から見た灣江地帯及び難波附近の歴史地理の究明に對しては敬意を表する所であり、現在のところ之以上の論考は他に求め難い所であらう。この天坊氏の永年の研究による歴史的资料を眞に生かし、根底ある難波附近の歴史地理の闡明には地理學徒の協力による地域の自然的研究を行ひその總合思想をなすにある事を切言したい。

元來歴史地理なるものは、地理學の一部門としての學問である。然るに舊來は歴史學の一分科的存在に止り、歴史の説明の一方便たるに過ぎなかつた。ここに過去半世期の間に歴史地理學なるものが

殆ど發達しなかつた根本の理由がある。將來の歴史地理學は地理學徒の手によるものでなくてはならぬ。そして本來の歴史地理に還し考古學者、歴史學者の協力の下に進むべきである。普通の場合地理學徒は歴史的知識が貧弱であるから、假令その地域の自然的思索は或程度達成し得たとしても、その上に發展した歴史的事實の研究なくしては、不可能である。ここに歴史學と地理學とは事の兩輪的密接關係が存立してゐる事は言ふ迄もない。歴史地理學が歴史學、地理學の兩方面よりの研究が不可欠なる以上、兩方面の研究對象が必要である。然るに兩學を兼ねる學者は寡い。故に兩者が協力して地域の歴史地理を研究する事が緊要である。舊來我國の學問はあまりにも各個々に分離し過ぎてゐた爲めに、この種の協同調査による業績が寡く、甲論乙駁時に推測の泥試合的なものもあつた。平城京の條坊並にその附近の條里研究が驚くべき進歩の跡を示したものは結局、關野貞博士の精密なる科學的調査と、喜田貞吉博士の歴史的檢討との論考切磋の賜である。この二者の中一を缺いてゐたならば平城京條坊及附近の條里研究は恐らく偉大なる業績は遺されなかつたであらう。

天坊氏の難波入江を始め大阪附近の變遷史の研究は實に協同調査の實驗臺にも當る所である。更に各方面の協力を得られ科學的調査を行ひ、地人兩方面より深く研究を進められれて模範的歴史地理の確立に邁進せられん事を切に望む次第である。(大八洲出版株式會社刊定價百二十四)

彙報

例會

史學研究會では今後例會において共通のテーマをとりあげて共同研究をし、また例會は京大のみならず、各地各大學に移動的に開催することゝなつた。まず第一、二回は「近代性の問題」をとりあげて西洋史、國史、東洋史、地理學の各方面より論じ、第三回には考古學の新しい問題をとりにあげた。

第一回 昭和廿三年一月二十六日京大陳列館にて

「近代性の問題」 (西洋史) 前川貞次郎氏 石田 一良氏

第二回 二月九日同所にて

「東洋に於ける近代主に就いて」 (國史) 北村 敬直氏 水津 一朗氏

「近世と宋閩地」 比較史的考察

第三回 五月十六日同所にて

「邪馬台國問題」 考古學上より見たる上代日本と大陸との關係

尙五月十二日午後一時より大谷大學にて左の如き例會を行つた。

「宗教改革運動について」 井上 智勇氏

「鎌倉時代における教界革新について」 藤島 達朗氏